広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	パヴロス・ニルヴァナス 「ある犯罪の物語」
Author(s)	橘, 孝司
Citation	プロピレア , 28 : 104 - 95
Issue Date	2022-12-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053437
Right	Copyright (c) 2022 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	

翻訳

パヴロス・ニルヴァナス「ある犯罪の物語」

國立臺中科技大學應用日語系　助理教授
橋　孝司　訳

ある恐ろしい犯罪がわたしの人生に暗く垂れこめている。世間が知る通り、わたしは友人アンドレアス・Kの妻を殺し、その罪で有罪とされ、二十歳から五年間収監された。わたしがなぜ親友の妻を殺したのか、その理由も当時の法廷での証言や新聞報道により、万人の知るところである。しかし、殺害行為以上に、わたしをそこまで駆り立てた理由のせいで――と、これまた裁判記録によるのだが――わたしの名前と尊厳には例をみないほどの不名誉が塗りつけられている。

その理由とは次のようなことである。わが友アンドレアスはずいぶん前にリーナ・Bに対する愛情をわたしに打ち明けていた。リーナはわたしたち二人とも馴染みの家の娘で、彼は女性の両親の同意を得られずとも結婚するつもりだった。わたしは説明しがたい熱狂に後押しされてこの恋愛を助けてやろうとした。ある夜、わたしと、さらに別の律儀な人間二人の助けを借りて、彼は娘を家から連れ出し、人里離れた教会で密かに結婚した。冠（クラウン）の交換はわたしが行った。

それ以降も――あくまで新聞と裁判記録によるのだが――わたしは彼の家庭での一番の親友だった。アンドレアスから絶対の信頼を寄せられたわたしは、毎日のように家を訪れ、彼が不在のときには、散歩や劇場へ夫人のお供をすることになった。アンドレアス家とわたしの密な関係が世間の口の端に上り始め、そこまで友だちを信用するのはいかがなものか、と善意から彼に耳打ちする人まで現れるほどだった。しかし、かの善良なアンドレアスは親友に絶対的な信頼を置いており、いまだ友愛と尊厳を信じる無邪気な人物なのである、とある新聞は書いていた。

ところが、ある夜のこと。これも裁判記録と新聞によるが、アンドレアスがいつものように夜間、クラブに出かけて留守の時、わたしは庭の小さな門からこっそり家に入った。この点は隣家の女性が窓から見ており証言をした。この人物はわたしだと気づき、好奇心にまかせてわたしが再び出てくるのを見ようとして、同じ位置を動かずにいたという。かくして法廷で主要な証人の一人となった。というのも、後に明らかにされたように、アンドレアス家の召使はその夜不在だったからだ。さて、件の女性は、わたしが家に上がっていった半時間後の真夜中ころ、家の中で激しく言い争う声を耳にした。諍いは長く続いた。リーナ夫人の怯え切った声が聞こえ、銃声がこだました。その後静寂が戻った。隣家の女性は叫び声をあげ警察を呼んだ。ほどなく二人の憲兵が到着し、隣人たちや通行人とともに惨劇が起きたらしい家に飛び込んだ。

彼らが家に入って目にしたのは、夫人が低いソファに倒れ血の中を漂う姿だった。

すでにこと切れているようだった。向かいには背中を壁でささえた男――他ならぬわたしだが――が、怯え切った眼をむいて身じろぎもせず、夫人を見つめていた。この男は警察を見ると、「逮捕してくれ！　ぼくがやったんだ」。それ以上何もいおうとしなかった。この後悲劇が続く。ドアが開いて、殺された夫人の夫が入ってきた。いつも通りクラブから帰る時間だったのだ。慄然とする光景の前で彼は凍りついてしまった。そのとき、憲兵に捕まっていた男は故人の夫にもう一度いった。「ぼくが殺した。ぼくのものにしたかったのに抵抗されたんだ。法の定めに従うよ」。（このことばは法廷でかつてないほどの悪い印象を与え、検事は「獣による下劣な告白」と断じた。）殺害された夫人の夫は犯人を引き裂こうと突進したが、憲兵たちが押しとどめた。「奥さんは立派に亡くなったんだ。殺人は法がきちんとさばいてくれる」と男はまたいった。それから夫は遺体に覆いかぶさり、青白い顔に狂ったように口づけをそそいだ。憲兵たちは犯人を連れて出ていった。夫は嗚咽に呑み込まれそうになりながらいい続けた「一番の親友が！　一番の親友が！」

法廷の陪審は被告に二十年の禁固刑を言い渡し、《ある程度の心神耗弱》ゆえの情状酌量を加えた。

これがわたしの生涯にまとわり続ける犯罪である。

しかしながら事実は、法廷で明かされわたし自身が自

白したように起きたわけではない。わたしには殺人の責任がある。そのことはどうあっても否定できない。だが、犯罪には本当の理由があったことを知ってもらいたい。それゆえ獄を出た今日、この一書をしたためているのだ。わたしの死後、これを公開するよう遺贈人たちにお願いしたい。ただ、それはアンドレアス・Kの生前であってはならない。なにが起ころうとも、事件の真相を彼が知ることがあってはならない。

さて、かの犯罪はわたしの人生と尊厳を踏みにじってしまったのだが、その本当の事情は以下のとおりである。生涯にわたって不名誉に苦しみ、死後人々の念頭から忌まわしく恥ずべき誤解が消え去るように望む人間として、正直にこれを語りたい。そのような誤解を引き起こしたのは、自分では気高いと信じたある目的のためだった。

アンドレアス・Kはわが竹馬の友であり、兄弟以上に愛していた。ともにすごした一点の曇りもない甘美な思い出を一つ一つ物語るつもりはない。わが友がリーナ・B――わたしがこの手で殺すことになった女性――を愛した瞬間から始めよう。

リーナはわたしたち二人と親しい家庭の一人娘で、美貌と華やかさに富み、姿を見せるや周囲に大きな幸福と、しかし同時に災厄をまき散らす存在だった。初めてアンドレアスにこの娘への思いを打ち明けられ、彼女の心の中に甘美な手ごたえを感じているんだと聞かされた時、わたしは友のためある奇妙な恐れに凍りついた。この方面には奥手だったが、わが友の愛し方が愛情に返礼するのを息苦しくさせるほど徹底したものであるのは承知していたからだ。その種の愛情に対して完全に応じることができるのは、自然から冷遇されることのないものの魂だけだろう。そしてリーナは美しく、自然から贈られるあらゆる優美をそなえていた。多くの人々に美を分け与えるために創り出される花のようだった。

「向こうは君を愛してるのかい？」ある晩、わたしの胸にもたれる彼に尋ねてみたところ、彼は恋する思いを明かした。

「そうみたいだ。ぼくを愛してるって」静かにこたえた。

その夜はそれ以上何も語りあわなかった。そのほかのことはすべて雲一つない空で途方もない輝きを放つ星々と、足もとで秘密めいた音を立てながら引いて行く波とに語るにまかせていた。そうやってわたしたちは、長いこと押し黙ったままでいた。

翌日は彼を見かけなかった。わたしたちの兄弟同然の生活で初めてのことだった。だが、元気にしているのはわかった。その後しばらくは、会うのがさらにまれになった。三日か四日おきだった。彼はそれほどの間姿を消したことに言いわけをするのが常だったし、わたしも穿鑿することなく受け入れた。失われたその時間を何にあてているのかわからなかったが、何かがわたしたちの友愛の時を奪いつつあるのだと感じた。そのへんを、冗談めかしながら、しかし憂鬱さもまじえて説明してやった。かなりの借金を背負った人間が、他人に用立てた小口の借金をぜんぶまとめて必要な大金をつくるように、わが友は周囲にふりまく小さな愛情をすべて集めて、大きな愛を差し出そうとしているんだな、とわたしは心に思った。後で聞き知ったことだが、なぜか家族との関係も冷え切り、親しくしていた者たち――もちろんわたしほどではないが――も同じような不満をもっていたらしい。

わたしといえば、不満はなかった。わたしの献身はなにか運命めいたものだった。わたしたちは皆、人からもらった愛情を返さなければならない。その相手が愛情の大きな借りを返す必要に迫られた時には。

数か月たったある日、わたしに会いたいといってきた。

「聞いてくれないか！」論じてもいない大議論の結末に達したかのようにいったが、そのまなざしを一目見てわたしは悟った。

「リーナを娶ることにした。君どう思う？」

恋する相手に乞われて助言を与えることほど、世に無駄なことはない。代わりに質問をしてみた。

「申し込みに行ったのかい？」

「必要ないよ！」と答える。「許されるはずがないのはわかってる。奪いとるつもりだ」

「彼女の思いは？」わたしは尋ねた。

彼は微笑んだ。

「ついて来てくれるかい？」しばらくして訊かれた。

わたしが何もいわず手を差し出すと、感謝しながら握り返してきた。断るにはもう遅すぎた。この先、導いてくれるのは運命だけだ。彼に微笑んでくれるようにと祈った。

二年間アンドレアスはリーナと幸せに暮らしていた。そして生涯幸せに過ごしただろう。二重の悲劇につながる忌まわしい出来事さえ起こらなければ。そこではこのわたしが最大の被害者となった。

かつてアンドレアスは結婚する何年も前にわたしにいったものだ。
「ぼくがいつか結婚するとして、妻に欺かれているのを君が知ったとしても、どうかぼくらの友愛に誓って、何もいわないでいてほしい」
それは恐ろしい予感だったのか。それとも冷静に熟考されたものであり、そうなった場合には従うべき依頼だったのだろうか。
「ばかなことをいうなよ！」
そうしてわたしたちは話題を変えたのだった。
しかしながら、アンドレアスが結婚した瞬間から奇妙にも、彼の幸せを見守り、そのためには寝ずの番をするのも自分の義務だと感じるようになった。どうしてこんな思いが根を張ったのかわからない。が、自分にはこの結婚の行き手に起こることにいささかなりとも責任がある、と心の中で囁くものがあった。アンドレアスの幸福については本人以上にうち震えていた。彼自身は二年経っても最初の頃と同じく妻を恋していたし、人を深く愛するなら、その愛情が恋人の心に反映してお返しをもらえるものと信じきっていた。しかしながら、わたしはその幸せゆえに震えが止まらなかった。

ある時、わたしたち二人を知る知人がいった
「あのな、うわさがあるんだ。リーナとB大尉のことだ。何か聞いたことないか？」
「ありえない！」わたしはいった。「世間は悪意だらけだ！」
しかし、心の中では恐ろしい確信が生まれ始めた。世間の悪意とはいったものの、たしかに悪意は偉大な創造主ではない。ただの才能だ。才能は創造をおこなわない。それができるのは創造主だけだ。世間の最悪の讒言は無からは生まれ出ない。その作品はつねに誰かにもらった話題の上で編まれるものである。底をさらっていくなら、隠された現実の原型に突き当たるだろう。
正直に言って、わたしは定期的にアンドレアス家を訪れていたにもかかわらず、疑惑の生じる出来事を少しも感じていなかった。いつもその種の発見に目を光らせていたともいえない。それに件のB大尉はアンドレアス家に頻繁に出入りする客ではなかったし、家族ぐるみのつきあいがあったともいい難い。後から考えて疑わしかったのは、終り頃リーナが彼に見せた優しさだろう。罪ある女たちに特有の優しさだった。夫を欺こうとする欺瞞やたくらみからくるとは思われない。むしろ、ひじょう

に自然で正直であり、それゆえそんな場合にはごくありふれたふるまいだ。思いがけず、想像もしなかった新しい幸福を与えてくれる男へのある種の感謝である。しかし、これはかの恐ろしい物語の細部を思い返しながら、今になってわたしが想像するところであり、結局たいした意味を持ちはしない。

とにかく、B大尉はこの物語の実在の人物である。ほどなくしてわたしは証拠を手にした。ある夜、たまたまある知人とクラブの外を通りかかった際、アンドレアスが入っていくのを見かけた。この知人は例の噂を口にした男だったが、わたしの腕をつかんで歩道の暗がりへと引っ張った。

「ちょっと待つ気があるならだ」小狡そうにいう。「B大尉がクラブから出てくるのが見られるぜ」

「つまり、その……」わたしはうろたえていった。

「つまり、そういうことだよ……」と彼。「わかるだろ！」

もはやなにもいわず、わたしたちは立ち止まった。十二月の美しい冬夜の十時ころだった。実際に十五分後にB大尉が私服でクラブの戸口に現れた。一瞬立ち止まったが、決心したように素早い足取りで向こう側へと歩き出した。角に止まっていた馬車屋が、知り合いらしく名を呼んで乗りませんかと尋ねた。彼は頭を振って断り、急ぎ足で立ち去った。

「ここで失敬するよ」わたしは知人にいった。

「奴をつけるつもりかい？」わたしにいう。「そんな苦労をしなくても、どこに行くかはっきりしてる」

「なに考えてるんだ！」わたしはできるだけ素知らぬ顔で答えた。「ポーカー仲間が待ってるから。それじゃ」

知人が角を曲がると、わたしはクラブの外で待っていた馬車に飛び乗り、アンドレアス家のそばの小さなカフェニオの住所を告げた。大尉はいつもの習慣で徒歩で夜道を歩いていく。とにかく先に着きたかった。馬車が街の細道を走るあいだ、第三者や無関心な者がある物事を細々と知っている一方で、当事者や利害の関係者が想像すらしていないとはなんと奇妙なことだろうと考えこんでいた。

しかし、この忌々しい冬の闇夜の追跡のきっかけをつくったかの知人などは妄想でいっぱいのありふれた告げ口屋に過ぎないさ、と密かな希望を抱きながら、やがてカフェニオに到着し、アンドレアスの家の門に面した窓ガラスのそばに腰を下ろした。しかし、しばらくのちに

目にした光景のせいで、二時間きたない暖炉の後ろに坐り、外の視界をおおい隠す蒸気をイライラと拭き続ける羽目になった。そうしてB大尉が家を後にするのを待った。なんということだ！　汚れが戸口から忍び込み、幸福は窓から飛び去っていた。すべてはわが友がかつて予言した通りになっていた。

野卑で不愛想な者たちにまじって小汚いカフェニオで苦悶の二時間を過ごしたのち、わたしは決心した。B大尉に続いてわたしも、アンドレアス家に対する友愛という勇気を抱いて家に入ろう。

誓っていうが、邪な思いなど抱いていなかった。ただリーナに会って、すべてを知っていると明かし――動かぬ証拠がある以上、恥ずべき行いは否定しようがない――夫には一言もしゃべらないと約束したうえで、大尉とはすっぱり関係を立ち、元の道へと立ち戻るよう誓わせるつもりだった。

すぐに庭の扉へと急いだ。いつも通り柵の後ろにぶら下がっている鍵を手に取って開け、中の扉へと進み、リーナが横になる前に会おうと急いだ。庭に面した窓はまだ明かりがついていた。窓ガラスを軽くたたき、自分であることを知らせようと叫んだ。

「リーナ夫人！　リーナ夫人！」

窓が半ば開き震える声が、ただしそうは見せまいと努めながら、甘く穏やかに語りかけてきた。

「あなたですか、パヴロスさん？　こんな時刻にどうして？　何かあったんですの？」

「驚かせてもうしわけありません、リーナ夫人」わたしは動揺を隠しながらいった。「アンドレアスにどうしても会わなければならないんです。窓に明かりを見たものですから……すみませんが、アンドレアスは中ですか？」

リーナはほっとしたようだ。

「まだクラブから戻っておりませんわ」と返事がした。

「でもそのうち帰ります。中で待たれますか？」

「恩に着ます。もしご迷惑でなければ……」

「そんなことおっしゃらないで。すぐに開けますから」

しばらくしてわたしは小さな客間にいた。愛情と幸福の漂う中でいく晩も過ごした場所だった。

「おかけください」リーナ夫人がいった。「申し訳ありませんが、わたくしは休ませていただきます。ひどく頭が痛みますので」

そうして、友を待つあいだ時を過ごすようにとわたし

の前に絵入り雑誌を置いた。
「ほんの少しだけ、よろしいですか、リーナ夫人……」
わたしは嘆願するようにいった。「二分だけ」
相手は立ち止まった。わたしは目を向けた。その夜の彼女の勝ち誇ったような美しさはアンドレアスと結婚したころを思い出させた。最初蒼白だった顔には朱色の波があふれ出て、薔薇がいっぱいに咲き広がった。小ぶりの耳は真紅のカーネーションのごとく炎を放っていた。化粧によって巧みに仕上げたかのような影の中で、双眸から煌めく稲妻は夏空でたわむれる嵐を思わせた。まこと絹のごとき髪は微かに灰の色合いを帯び、強い風にかき乱されたかのようにひたいに垂れ、白い首筋にこぼれかかっていた。リーナの艶っぽさはその絶頂にあった。
ただちにわたしの思いは二人の人物のもとへと飛んだ。まず大尉へ。それからアンドレアスへ。わたしは嗚咽の中に沈んでしまうのではと感じた。
「どうかお掛けください、リーナ夫人。ほんの少し！」
彼女は腰を下ろしながらも、わたしがいることに不安と困惑を感じ、部屋を出ていく気振りを見せていた。
もはやわたしには何も目に入らなかった。波をかぶってしまったかのように、目前を美しい顔がかすんで通り過ぎ、さらにかつての幸福を知る周囲の家具が、奇妙な目つきでにらみつける壁の肖像画が、ガラス戸の後ろで数えきれない秘密を隠し持つ丁寧な装丁本の小さな書棚がぐるぐると回っていく。周りのこれらがすべて、夢のように曖昧で耐えがたく、虚ろでぼんやりとしていた。
一瞬の後、わたしの視線は赤い大きなソファに落ちた。現実がはっきりと目に飛び込んだ。クッションが乱れ、下に落ちているのもあり、上掛けは斜めに傾いで床板の上まで引かれている。わたしは夢から覚めたように感じた。
「お聞きください、リーナ夫人……」
自分が何を口走ったのか、もはや覚えていない。だが、善意と真心をこめて語った。そのあと、彼女が目の前で飛び上がりいきり立ったことは覚えている。わたしを罵倒し、ごみのように蔑んだ。
「このことは決してご主人にはもらしませんので！」わたしはいった。「お好きなようになさってください」
彼女はわたしに突っかかってきた。
「脅さないでください。どうぞ、すべて主人に話してもらってけっこう。わたくしもご主人に打ち明けますので。もちろん主人はこのわたくしの話を信じてくれるでしょ

う」
「打ち明けるって。何をです？」
「こんな時間に押し入って来て、わたくしを侮辱したことをです。主人の親友ともあろう人が。その悪党をわたくしは階段からつき落としたんだって」
そうして、憑かれたようにわたしをドアのほうへ押しやり始めた。
その後は何が起きたのかまったく記憶がない。どこからピストルが出てきたのか。わたしがどうやって手にして引き金を引いたのか。ぜんぜん覚えていない。覚えているのは、ある瞬間悪夢から覚めると目の前に死体があり、一人の人物が狂暴にわたし目がけてとびかかり、二人の憲兵がその狂気からわたしを守ろうとしていたことだけだ。アンドレアスだった。
「どうして殺した？　どうして？」泣きじゃくっていた。
突然リーナが殺される直前に発した言葉がわたしの脳裏に浮かんだ。
「彼女をものにしたかったんだ」わたしはいった。「なのに拒まれた。奥さんは名誉を守って死んだよ！」
彼は床の遺体の上にくず折れ、抱きしめながら口づけを注いだ。わたしは拘置所へと連れて行かれたが、暗いわたしの目には、最初の頃と同じく純真で貞淑、高貴なままの妻を抱擁する友の姿が今なお浮かぶ。そうして奇妙な幸福がわたしの胸にあふれていた。
残りの事実については、すべて上で語ったとおりだ。この手稿を見つけた方はわたしの死後公開するように配慮していただきたい。ただし、アンドレアス・Kの生前はいかなる理由があろうとも、公開を避けるように。彼の妻をわたしが殺害するに至った本当の理由を、彼が知ることがないようにと望むものである。

【解説】

以上は、初の現代ギリシャ・ミステリ作品で知られる《新アテネ派》の作家パヴロス・ニルヴァナス（一八六六年―一九三七年）が短編集『神の通過』*Το πέρασμα του Θεού*（一九二二年）に収めた「ある犯罪の物語」*Ιστορία ενός εγκλήματος* の全訳である。

この短編集には十一の短編が含まれる。「ある犯罪の物語」は題名通り、クライムストーリーであるが、より初期の短編集、例えば島の風俗小説の趣きが強い『パルセニス神父伝』（一九一五年）などに比べてみると、「神の通過」「命の夢」「死の道連れ」「ヤナキス」など幻想的な雰囲気の作品が目を引く。特に、豪雨の中を駆ける乗り合い馬車がいつのまにかあの世に至る「死の道連れ」と日頃夢見がちな男が幻燈機の世界に入り込む（乱歩「押絵と旅する男」を思わせる）「ヤナキス」は忘れがたい。

「ある犯罪の物語」はハリス・パツィス編『現代ギリシャ文学大百科』*Χάρης Πάτσης, Μεγάλη Εγκυκλοπαιδεία της Νεοελληνικής Λογοτεχνίας* のアンソロジーの部にも代表作の一つとして採られている。

翻訳の底本としては、クレタ大学図書館作成の「現代ギリシャ研究デジタル図書館 Ανέμη」（Ανέμη - Ψηφιακή Βιβλιοθήκη Νεοελληνικών Σπουδών (uoc.gr)）で公開されているスキャンデータを利用した。

なお、作家ニルヴァナスについては、『プロピレア』二十八号所収の拙論「パヴロス・ニルヴァナス『プシヒコの犯罪』――現代ギリシャ・ミステリの嚆矢と普通文学――」を参照していただければ幸いである。